

「パープルスイートロード」の誕生

福島県農業総合センター 所長 こまき 小巻 かつみ 克巳

昭和50年代中頃、サツマイモの栽培面積はでん粉原料用需要の激減により、ピーク時の44万haから6万数千haに低迷していた。さらに、サツマイモの消費を支えていた焼酎ブームも下火となり、サツマイモ関係者はでん粉や焼酎の原料に代わる新しい用途開発に躍起となっていた。

その時注目されたのがカロテンやアントシアニンなどの色素を含むサツマイモで、新しい加工技術、色素抽出、色素成分の健康機能性の解明など、これまでのサツマイモからは想像もできなかった技術開発が進められようとしていた。この動きに合わせて、カロテン品種「ベニハヤト」(平成59年)、アントシアニン品種「アヤマラサキ」(平成7年)、加熱した後も甘くならない「サツマヒカリ」(昭和62年)などの新しい品種が次々と育成された。このうち、健康機能性に富むアントシアニンを含む品種は青果用としても期待されたが、食味が不十分で、その改善なしに利用することは困難な状況にあった。

そんな状況の中で「パープルスイートロード」は育成された。品種になるまでのスピードは速かった。平成8年に交配し、6年後の平成14年には農林水産省の登録品種に認定された。母親はアントシアニン系統の「九州119号」、これにいもの形状が優れる青果用の5品種の花粉を混合して受粉

する多交配法を用いた。多交配種子からは、いもの形状と揃いが良く、肉色が紫の個体が多数生まれ、食味もこれまでのアントシアニン品種より数段優れていた。育種期間短縮のため、品種登録の審査基準に必要な試験以外は可能な限り省略し、選抜世代の飛び級、早い世代からの病虫害検定試験の実施などを行った。このため、育種試験用種いもの増殖が間に合わないこともあった。

「パープルスイートロード」は、私がサツマイモの新品種育成に直接関係した最後の品種である。品種登録の手続きなど、仕上げは後任の中谷誠氏にお願いしたが、新品種がこんなに狙い通りに、かつ早く育成できるのはまずないことであり、最後のチャンスでこうした幸運に恵まれて本当に嬉しく思っている。反面、品種化を急いだせいか、「中」と評価した立枯病抵抗性が「弱」に近いこと、生育後期の冠水でいものが腐りやすいこと、などが後にわかり、生産者に迷惑をかけることもあった。育種に時間をかけるのはそれなりの意味があると身をもって知ったところである。

先日、「パープルスイートロード」が大好きという女性に出会った。育成した品種を気に入っている人がいると聞くとより喜びが増す。自慢話と反省と感謝の気持ちを書かせていただいた。